

キャンプをはじめた原点を振り返る

緒方 篤朗

2005年4月の緑の日、家族4人でツツジが見頃の新宿御苑を訪れ、レジャーシートを敷きお弁当を食べるプチピクニックを楽しんでいた。祝日ということもあり、ちょうどイベントが開催され、日本オートキャンプ協会のサイトもあった。そこに立ち寄った妻がIFCCの「みんなのキャンプ」のチラシもらい、「初心者向けのキャンプ教室があるらしいけど面白そうだから行ってみない？感じがいい人たちだったよ」と。

もともと、「自然の中でテントを張って寝泊まりして、おいしい空気の中で野外料理を楽しみ、子供達と遊んだら楽しいだろうな」という憧れのような、イメージ先行のみで関心を持っていたものの、BBQデイキャンプ（当時はこの「デイキャンプ」という言葉も知りませんでした）に止まっていました。「日帰り」と「泊り」、要するに「テントを張るか張らないか」の隔たりは、現地でテントが張れないという失態を見せたくない、その一方で近所の公園などで事前練習なんかもしたくないという、妙な男のプライドは、踏み越えるには大きなハードルだったように思います。

IFCCの「みんなのキャンプ」のチラシを読んで、IFCCメンバーの話を聞いて乗り気そうな妻の話を聞いて、そうした妙なプライドはなんだか一瞬にして吹き飛ばされ、というか感じさせずに「行ってみたいな」という感覚になった。

“キャンプはやってみたいけれど、なかなか始められないという人たちのキャンプデビューをサポートするために、「みんなのキャンプ教室」を開催します。これまで一度もキャンプしたことがない人も、キャンプ道具がない人も、キャンプを楽しみながらキャンプの基本を身につけることができます。親子、夫婦、家族、あるいは友人同士で参加してください。”

このキャッチフレーズは、当時も今もコンセプトを変えていないものですが、この短いフレーズの中には、「初心者向けである」という当たり前の前提に加えて、「実際のキャンプ場でOJT指導してくれる」「道具はなくてもOK」という初心者の実態に配慮したポイントが含まれている。そして何よりも、新宿御苑という場所で実際に指導してもらえるであろう人に対面で話を聞き、毎年自分と同じような初心者キャンパーが数組集まっているという実績をリアルに聞くことができ、心を一瞬で突き動かされたのだと思います。その後、予定通り「みんなのキャンプ」に参加し、勿論全てが新鮮な体験に出会い、その後のオートキャンパー活動の盛り上がりにつながっているのですが、ファーストコンタクトとなった新宿御苑での人と人との出会いは、自分にとっては「みんなのキャンプ」そのものよりもキャンプの原点になっている気がします。



話は変わりますが、Facebookが実名主義で特定の属性を基に繋がる双方向のコミュニケーションを特徴としてインターネットの世界で快進撃を遂げているのは、「信頼感」とか「絆」を大切にしている人の本質を突いているからではないでしょうか。氾濫するほどのネット上の情報の中で、やはり大切にしたいのは「確かな関係」「実際に知っている人からの情報」であるということではないでしょうか。実際に、今Facebookをよく活用していますが、高校時代、大学時代、元同僚や

同期などのよく知った人と交わす、相手の顔の見える情報交換（投稿写真、好きな音楽・趣味に関するリンクなど）は、とても居心地のよいネット上の空間になっています。Google に象徴される「検索」「検索に紐づいたお薦め」という情報の海から情報をゲットするスタイルから、「この人のお薦めなら見てみよう（読んでみよう）」「この人がやってるなら自分も試してみようか（自分もがんばってみよう）」という活動と連動しやすいネットワークツールに変化しているように思います。

話しをキャンプをはじめた原点に戻しますが、それは、極めてアナログな関係、人と人との出会い、生の声を介した信頼感のある情報との接点であったということです。オートキャンプの醍醐味は「自然を活かしながら、人と人の出会いを通じてコミュニケーションを楽しむこと」であると個人的に勝手に思っていますが、自分はこの醍醐味を、あの2005年の緑の日に、IFCCの人たちとの出会いで瞬間的に感じることはできたのではないかと、今は思えてなりません。